

和の郷の精神⑦

木内博一の
のマネジメントと

取材・構成 浅川芳裕

なぜいま農業の時代といわれるのか

金融危機の余波で工場労働者の首切りが常態化し、その受け皿として農業がもちあげられている。なぜ農業なのか。工業と農業の違いは何か。農業のどこにそんな可能性があるのか。考えてみた。

「百年に一度の不況」が押し寄せ、巷では「これからは農業の時代だ」との声が上がるようになった。一体、農業のどこにそんな可能性があるのだろうか。誰もちゃんと説明しきれない。自分なりに考えてみた。

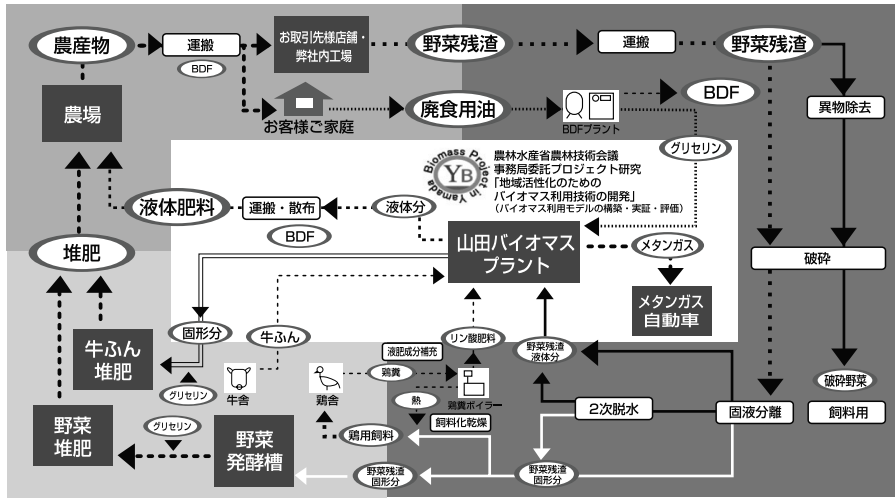
これまで大きく日本を引っ張ってきた動脈産業は工業である。その特徴として、ヒット商品ができると競合が生まれそこから寡占化が進みやすいことが挙げられる。一方で、分解できる工業製品は模倣もしやすい。商売を継続していくには、利益を減らすか、いかに安い原料を調達するかだ。需要があるうちはそれが工業の成長モデルだった。

現在、レアメタルなど鉱物資源の食い潰しが進み、そのモデルが限界に達しつつある。同時に市場が縮小するなか、リプロダクト商品が世にあふれて、今までのようなペースで動脈を拡張することが困難になっている。



「ロサンゼルス・タイムズ」のシェルダン・チャド記者から取材をうけた。アメリカ人が読者であることを念頭に、興味を引くテーマを自ら設定し、ロジカルに論旨を導き出す。こうした思考訓練を重ねておくことで、相手が何人だろうと通じる話ができる。

「和郷園」野菜残渣のリサイクル・フロー図



日本の地域経済は工場立地で栄えてきたが、金融で先行需要を食い尽くした結果、空洞化している。そのため、これまで工場などへの転用期待で高値がついていた農地が、適正価格に下がり利用、購入しやすくなる。農業は生業からビジネスとして専業農家が正味の勝負ができる環境が生まれるのだ。

農業と工業の違い

農業の構造は工業とどこが違うのか。農業にとっての動脈とは食品を作り出して世に送り出すことである。さらに廃棄された未利用資源を回収利用する静脈産業の部分も持ち合わせている。もちろん工業にも原材料のリサイクルという静脈はあるが、そもそも循環から発している農業と比べると、その意味はまるで違う。

たとえば和郷園ではスーパーや外食業者から野菜残渣や廃食用油を回収し、それをバイオプラントで加工し、液肥やメタンガスを生産している。現在、組合員の圃場120haのほとんどは自家製の肥料でカバーできているし、メタンガスは農機の燃料などに利用可能だ。近年、肥料や燃料費が高騰したときも、まったく影響を受けずに対応できた。この「循環によって別の新しい価値を生み出せること」こそが、農業の潜在成長性に他ならない。動脈であるプロの専業農家の活路が開ける環境が整い、静脈として未開拓の産業フロンティアが広がる。和郷園のモデルはその進化のほんの入口に過ぎない。

移りゆく人々の欲求

これまで消費者の一番の欲求は車や家電製品の購買に向かっていた。しかし現在、その意識は食・健康・文化へと移りつつある。そしてその受け皿として、農業が果たせることは山ほどある。心の静脈産業ともいべきサービスの時代の幕開けだ。とくにヘルスケアやアミューズメント関連の事業に可能性があるのではないか。そう考え和郷園では、新たに一般向け農場の経営に乗り出そうとしている。

まず千葉に農場を400区画作り、年会費をとって運営する。ここまでは市民農園と同じだ。しかし通常、会員は全ての収穫物を食べきれない。この消費できない作物を会員間、さらに和郷園の商品として売る仕組みを作る。より楽しむ動機づけとして「経済」を利用するのだ。目的は金ではない。消費者が生産者に転化して、これまで農家だけが享受していた豊かさを味わえる仕組みだ。しかし、都市生活の便利さを味わった人々にとって、素朴な田舎暮らしはすぐに飽きが来るだろう。そんなとき会員が散歩をしたり、絵を描いたり、工芸をしたり、温泉につき、海を眺め、自分の生命を感じ

てもらえるような「遊び」の環境をつくるのだ。

私自身もストレスがたまると、豪遊するよりも、無心に草抜きに励むことが一番爽快感を味わえる。リーマンショック以降人々は、金の一過的な価値に気付かされ、一方で、農業の循環、永続性に魅力を感じ出したのではないかと思う。金融で儲けた金で買った豪華なヨットの上から見る夕日。工場で働いた後、自転車で帰宅するときに見る夕日。農園で汗をかいた後、己の生命を感じながら見る夕日。最後がいちばん人間の本性に合っている。そう考える人々が増えている。これが「農業の時代」の真の意味だ。われら専業農家が、人々の欲求に応える時代がきた。

木内博一・Hirokazu Kiuchi

1967年千葉県生まれ。農業者大学卒業後、90年に就農。96年事業会社(和郷)を、98年生産組合(和郷園)を設立。和郷は2005年に(株)和郷に組織変更。生産・流通事業のほか、リサイクル事業や冷凍工場、カット・パッキングセンター、直営店舗の展開をすすめる。05年海外事業部を立ち上げ、タイでマンゴー、バナナの生産開始。07年日本から香港への輸出事業スタート。現在、ターゲット国を拡大準備中。本連載では、起業わずか10年でグループ売上約50億円の農系企業を築き上げた木内の「和のマネジメントと郷の精神」。本連載ではその「事業ビジョンの本質」を解き明かす。